平城京左京三条二坊

奈良市庁舎建設地発掘調査報告

Ⅰ　序　　章

1　調査の経過

この報告書は奈良市庁舎建設のために，奈良市が旧三笠中学校校庭で行った発掘調査の報告である。現在，奈良市東寺林町に所在する奈良市庁舎を奈良市北新町61番地にある三笠中学校敷地に移転することが決定したのち，この地域における埋蔵文化財，とりわけ平城京に関連する遺構の有無が問題になった。昭和47年春，埋蔵文化財に関する協議があり，同年８月１日から９月２日までの１カ月間地質調査と平行して，発掘に関する予備調査を行った。調査は岸俊男，沢村仁の指導で中村徹也が担当した。この予備調査で，平城京の条坊制にもとずく南北と東西方向の小路を発見し，くわえて古墳時代の遺構も存在することが明らかになった。

予備調査の成果にもとずき，最低限として庁舎敷の発掘調査を行うことになり，昭和48年４月17日に「奈良市庁舎建設地発掘調査委員会」を設置した。その委員の構成はつぎのとおりである。

岸　俊男（京都大学教授），木村博一（奈良教育大学教授），吉村正一郎（前奈良県教育委員），坪井清足（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長），沢村　仁（同遺構調査室長），狩野　久（同史料調査室長），池田邦三（奈良県教育次長），慶田八郎（奈良市助役），森井慶太郎（同教育長），中本正則（同建設局長），元田宇三郎（同建設局長），角脇一男（同庁舎建設事務所長）

５月10日の第１回の委員会において，吉村正一郎を委員長に選出し，小路の交叉点に関する遺構をできるだけさける方針で，庁舎の位置や発掘面積を決定した。この発掘調査には奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部があたることになり，庁舎敷を東西にわけ夏期と冬期

の２次にわたって調査を行うことになった。

第１次の調査は，平城宮跡発掘調査部の第83次発掘調査にあて，昭和48年８月１日から10月９日までの２カ月にわたって行い，調査面積は約3,200㎡であった。調査では坊内の南北小路をはさんで存在する十坪と十五坪内にひろがる奈良時代から平安時代初期までの邸宅に関する遺構を検出した。

第２次の調査は第86次発掘調査とし，昭和49年２月12日から６月４日までの４カ月を要し，その調査面積は約 3,000㎡であった。今次の調査では十五坪の中心部分の遺構，ならびに二坊大路の西側溝を検出した。この間５月13日の発掘調査委員会において，発掘調査で明らかになった遺構についてては記録保存としてとどめ，庁舎の設計に変更をくわえないことを決定した。

2　調査の概要

調査は奈良市北新町61番地にある庁舎敷約6,200㎡について行った。この地は奈良盆地の北辺に位置する沖積地であり，現在の標高は61.3m前後であるが，これは校庭盛土上面の高さであり，以前は周囲の水田と同じように標高60.9m前後とみられる。東の佐保川，西の菰川にはさまれるこの地域は，平城京条坊では左京三条二坊十・十五坪にあたり，南面を三条条間路（現在の大宮通り），東面を二坊大路で画している。三笠中学建設以前は，明田・高樋・竹垣内・大蔵という字名をもち，条坊地割りの痕跡をよくとどめていた(fig.1)*。

調査にあたっては，この地域を６ＡＦＩ―Ｈ・Ｇ地区と命名し，発掘区東方の南北に長い区域を東地区，西方の南北に長い区域を西地区，その間を中央地区と仮称した（fig. 2)。調査では十・十五坪を画する南北方向の小路，十五・十六坪を画する東西方向の小路を検出した。さらに二坊大路西側溝の一部を発見した。このことによって，十五坪の東西幅が 410尺であり，南北長も，約400尺前後という推測が可能である。坪の外周には築地ないしは柵の遮蔽施設をもうけ，そのなかが宅地となることが明らかになった。十坪では発掘面積がせまく，かつ遺構の密度があらいので，宅地内の建物配置を復原することはできない。十五坪では，ちようどその中心部を発掘したことになり，この坪を一区の宅地とする建物の配置を復原することが可能であり，ほぼ100年間に，大きく４期の改修が行われていることが判明した。

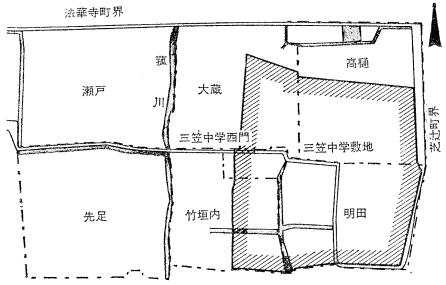

fig.1　三笠中学建設以前字限図

奈良時代の遺構と同時に，古墳時代の大溝を発見した。溝のなかには土器・木器などがおびただしく堆積しており，５・６世紀ごろの奈良盆地北辺の状況をうかがう重要な資料となった。宅地の廃絶後，15世紀ごろになって，十五坪の東半部に大きい河川の氾濫のあとがあり，流砂土のなかからこけら経などの中世信仰に関する遺物を発見した。

*字限図の原図は岸俊男氏から提供された。

3　調査日誌

第83次発掘調査　1973年7月30日～10月9日

6ＡＦＩ—Ｈ地区

7・30　予備調査の結果にもとずき，校庭造成時の盛土，水田の耕土，床土は，ブルトーザで排土することに決定。この作業が本日までに終了した。発掘調査の準備。

8・1　発掘区の西地区，中地区から床土の残土を排除。

8・7　床土排除終了。中央から西地区と中地区に向って遺構検出を開始。灰褐色土面で遺構検出を行ない，南北に走行する数条の溝を検出。この溝は新しい時期のものらしく，もう一層下の赤褐色土まで下げることにする。この面で石敷きの広がる部分がある。

8・8　西地区の東寄では南北にのびる旧水田地割りの境があり，この西方は一段低くなっている。排土中の灰褐色土には遺物が混在し，緑釉瓦片がある。中地区，灰褐色土を除去，南北の中央部分では瓦片の出土が多い。

8・9　西地区，発掘区の南部で土器，瓦片の出土多し。中地区，中央やや南寄りにバラスの散布あり，大型の石3個がある。礎石か。

8・10　西地区，南部で柱穴状の遺構出現。いまのところまとまらず。北部では灰褐色土に切りこんだ小溝が交叉してあらわれる。中地区，再度西端にもどって遺構を探る。西辺に接して，南北方向の溝らしきもの（のちにＳＤ872となる）があるが輪郭不明瞭。

8・11　西地区，発掘区のほぼ中央で，南北にのびる柱穴5間分を検出（ＳＢ875）。中地区，昨日発見した南北溝の輪郭を出し，北方から発掘。奈良時代の遺物があり，小路の側溝とみられる（ＳＤ872）。

8・13　西地区，依然として東西に走行する小溝が多数あらわれる。中地区，ＳＤ872の東側で南北に延びる柵15間分を検出，坪の外周を囲む柵とかんがえられる（ＳＡ871）。

8・14　西地区，11日に発見した柱列に対応する西側の柱列を発見。中地区，北部のＳＡ871の東側で，3間分の柱穴を検出。

8・17　西地区，発掘区の西南寄りで，南北小溝に重なって南方に延びる小穴列を検出。間隔は3尺程度で建物に関するものとおもわれるが，方位も南で西に振れており，性格不明（ＳＡ883）。

8・18　西地区，ＳＡ883は2番床土から掘込んでいることがわかり，奈良時代の遺構でなくなる。これの東側に位置する柱列は7間×3間で西廂付の南北建物となる（ＳＢ875）。発掘区の南部で，南西から北東にのびる砂礫の範囲は溝の痕跡らしい。

8・20　西地区，ＳＡ883と同じ小穴が西側で平行している。発掘区南西隅に，桁行2間以上，梁行4間南北廂付きの東西棟建物（ＳＢ876）があり，桁行さらに西へ延びるようである。

8・22　西地区，ＳＢ876は桁行5間分を検出するが，西妻は発掘区外にのびる。先に検出したＳＢ875は赤褐色土層の上面から掘りこんだものであり，ＳＢ876はその下層で検出したのであるから，後者の方が古い時期に属することになる。

8・23　西地区，西北隅で東西棟建物の東南隅を発見，桁行4間，梁行1間分を検出するが，それぞれ発掘区外へ延びる模様である（ＳＢ879）。ＳＢ879の南で東西方向の柵を5間分検出する（ＳＡ878）。その南に小土壙群があり，土器など出土。中地区，発掘区の中央で南北に延びる柵15間分を検出（ＳＡ870）。南は発掘区外に延び，南から7間目のところから，東1間を隔てて3間の柱穴が平行しており，柵に小屋がとりつく状況である。

8・24　西地区，ＳＡ878の南から発掘区の東北隅に向って蛇行する砂礫の部分は幅5ｍ内外の溝であり，奈良時代以前に遡る可能性があり，現状では掘下げない（ＳＤ880）。ＳＤ88の南で井戸を発見，方形の掘形をもつ（ＳＥ877）。

8・28　西地区，ＳＢ875の東で南北方向の柱穴を3間発見。中地区，中央の北半で南北方向にならぶ柱穴が出はじめる。いまのところ建物にまとまらないが，少くとも2時期以上の建物が重複する模様

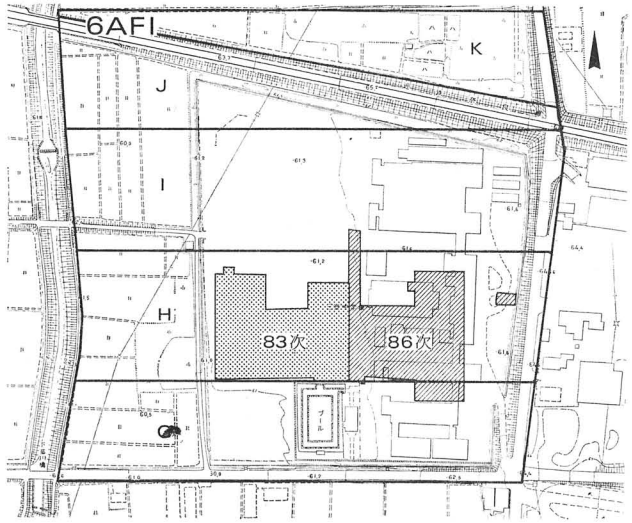

fig.2　6ＡＦＩ区地区割図

である。

8・29　中地区，中央の南半でも柱穴が出はじめる。

8・30　西地区，土壙などを検出。中地区，中央の柱穴は東にのびる東西棟建物で南北に廂がつくらしく，また2度の建替が認められる（のちにＳＢ882，ＳＢ864となる）。

9・1　西地区，ＳＤ872の西6ｍのところで南北方向の溝を発見，小路の西側溝とおもわれる（ＳＤ874）。中地区，中央の建物の約10ｍ南で，東西に延びる柱穴は柵のようである（ＳＡ863）。

9・3　中地区，南端の柱穴は梁行2間の南北建物らしい（のち東西棟建物ＳＢ862となる）。

9・7　西地区，ＳＤ874の西側には坪を囲む柵の遺構はなく，本来は築地でのちに削平されたか。

9・8　中地区，現在までに発見した柱穴を整理する。中央建物は桁行5間分を検出したが，東妻はさらに発掘区外に延びている（ＳＢ882・ＳＢ864）。南方の建物は2棟が重複したもので，桁行3間以上の東西棟建物（ＳＢ862）に桁行4間以上の東西棟建物（ＳＢ862）が重複している。ＳＢ862の北側にある柵ＳＡ863の東端は発掘区外に延びる。ただ柱間が狭く，2時期にわかれる可能性が強い。北方には桁行5間以上で西方の南側柱に廂がつく東西棟建物（ＳＢ869）があり，その南に3間×3間の小さな東西棟建物（ＳＢ866）がある。

9・11　西地区，ＳＢ879の北方を拡張する。ＳＤ880の西半分のみを掘り下げる。中地区，ＳＢ869の規模を探るため，西方に発掘区を拡張。

9・12　西地区，ＳＢ879は2間×4間以上で東西棟の建物となった。ＳＤ880の上層砂利面は奈良時代ないしは，それ以降のもので，下部に6世紀頃の大溝が存在する。ただ，下部溝の南岸については確認していない。中地区，ＳＢ869の西妻を検出。桁行6間以上の建物となるが，北廂の有無は確めていない。

9・22　現地説明会

9・25　中地区，ＳＡ884の東方で南北柵（ＳＡ885）を検出。

9・26　空中写真測量の準備。

9・27　空中写真測量，地上写真撮影。

9・28　地上写真撮影。

9・29　補足調査開始。東地区，発掘区南限でＳＢ861，ＳＢ862が重なる古墳時代の溝（ＳＤ881）の一部を発掘。

10・5　西地区，井戸（ＳＥ877）の発掘，枠板の保存良好，底に数個の完形土器がある。

10・9　発掘終了。

第86次調査　1974年2月12日～6月4日

6ＡＦＩ—Ｈ地区

2・12　バックホーでの盛土除去完了。発掘開始。中地区の西端から取残しの床土を排除していく。

2・15　東地区の東限からも床土とりを開始。土層は，粗砂，細砂，粘土の順で堆積しており，細砂層から中世の笹塔婆などが出土する。

2・16　東地区，中央部から笹塔婆こけら経の出土が多い。その南方は細砂層の上面で掘下げを止め西方へ向う。

2・18　東地区，東寄りに粘土で築く南北方向の堤状遺構があり，その西辺に杭がならぶ。これは校庭造成以前の畦畔か。

2・21　中地区，堤状遺構の幅は約5ｍで，その中央に浅い南北溝が走る（ＳＸ1055）。ＳＸ1055以東は東地区の土層の延長である。

2・27　東地区，細砂層の除去を開始。中央からやや西寄りに南北に延る堤状の遺構がある。その規模はＳＸ1055よりも小さいが，類似のものとおもわれる。東地区，東南隅での笹塔婆などの出土多し。

3・5　東地区，細砂層の排土は本日でほぼ終了。

3・8　中地区，遺構検出面を灰褐色粘土層に決め，その上部にある暗褐色土を除きはじめる。この2層の境目には遺物が比較的多く堆積する。南寄りで，ＳＤ881の東延長部とみられる遺構を検出。ＳＤ1055の東側で試掘坑を設定。深さ50㎝位で，人頭大の河原石を並べた石敷に遭遇する。（のちＳＢ970の柱根固め石であることがわかる。）

3・11　中地区，ＳＸ1055の東側で掘残しの細砂層を掘り，笹塔婆などを採集。発掘区西寄りでＳＢ882の東妻らしい柱穴を検出。

3・12　中地区，西端の南限でＳＢ862に伴う柱穴を検出する。

3・13　中地区，ＳＢ882とＳＢ864に伴う柱穴続出。ＳＡ863の東延長部分の柱穴も出はじめるが，83次とは少し様子が異なる。

3・14　中地区，ＳＢ882は東西桁行7間で終る。ＳＢ864はさらに東に延び9間になる可能性大。この2棟に重複して第3の東西棟建物出現。現状では，桁行2間以上で梁行1間分の柱穴を検出するが，西妻柱は1間分東にある（ＳＢ962）。

3・15　中地区，ＳＢ864は桁行9間で終る。ＳＢ882北廂に重複して，5間以上×2間の東西棟建物を検出（ＳＢ963）。西から3間目と4間目とに仕切柱がある。ＳＢ864の北に接する柵（ＳＡ865）はさらに東にのびる。中地区西北隅の拡張を開始。北面の小路を探るため。

3・18　東地区における細砂層の発掘過程において，この区域が中世の氾濫に遭い，奈良時代の遺構はすでに流失したものとかんがえていた。しかし，中地区の東寄りで地山に切りこんだ柱穴を検出し，奈良時代の遺構が東に延びる可能性が出てきた。

3・19　中地区，ＳＸ1055以西の遺構検出は大体終る。ＳＸ1055の東側中央で試掘坑を設定し，土層の状況を調べることにする。

3・20　中地区，中央の試掘坑で東西棟建物の西妻と南側柱にあたる柱穴を発見（のちにＳＢ970となる）。この試掘坑の北方にもさらに一本の試掘坑を入れることにする。その結果，東地区の全面に奈良時代の遺構が存在することが明らかになった。

3・26　中地区，北西拡張区の遺構検出ほぼ終了。ＳＢ868の北方に東

西に走る大小２条の溝を発見。南側の小溝に接する付近に土壙がかたまる。発掘区西南隅のＳＢ862とＳＢ861の桁行はともに５間となる。

3・29　現在までに検出した遺構について空中写真測量を行うことにしその準備にかかる。

4・2　空中写真測量。北西拡張区の地上写真撮影。本日にて A_1 班の作業終了。以後は A_2 班が発掘作業を継続することになる。

4・3　発掘調査再開。中地区，東辺中央に位置する根固め石のある建物（ＳＢ970）は，南北に廂がつく。発掘区北辺付近に小柱穴群があるが，いまのところまとまらず。

4・4　中地区，南辺付近では砂利層の下に暗灰色粘土層が薄くひろがり，その下でＳＤ881が東北方に延びる模様。ＳＤ881を切りこんで東西方向の柵（ＳＡ863）と土壙（のちにＳＥ967の掘方となる）がある。

4・5　中地区，ＳＢ970の桁行の西から３間目を検出。この位置で南北に延びる柵（ＳＡ969）12間分を検出，これが発掘区の南北を縦断しているようである。ＳＢ970の北側で梁行２間・桁行２間以上の東西棟建物（ＳＢ971）を検出。

4・6　中地区，ＳＢ971の桁行は３間で終る。ただし，南から延びてくるＳＡ969の柱穴とは重複する。中地区の遺構検出は一応終了し，東地区に移動。東地区では全域にバックホーをいれ，残土の青灰色砂層を除去することに決める。

4・12　東地区，ＳＢ970の東妻柱を検出，桁行５間，梁行４間の南北廂付建物となる。その北方の小柱穴群についてはまだまとまらない。

4・17　東地区，中央以東では青灰色砂層の下にある灰黒砂層を除去したのちに遺構検出に掛かることにする。

4・20　東地区，東辺から遺構検出開始。中央以北では柱穴が多いが，南方ではきわめて少ない。

4・22　東地区，北東隅で井戸の掘形（ＳＥ991）出現。その南方の柱穴群は数を増すが，まだまとまらない。中央部においても，方形の井戸（ＳＥ979）があり，四隅に石をおく。その南側では小柱穴が多い。

4・23　東地区，北方の柱穴群のうち，東西棟南北廂付建物（ＳＢ987）がまとまる。梁行４間，桁行４間を検出するが，東妻は発掘区外に延びる。ＳＢ987に重なって南北棟らしい建物が南に延るが，いまのところ不明瞭（のちにＳＢ986になる）。発掘区南限に沿って，梁行２間，桁行２間以上の東西棟建物を検出（ＳＢ974）西妻はさらに西に延びる。

4・24　東地区，中央部のＳＥ979の西方で，井戸を発見，側板と四隅の柱をとどめる（ＳＥ978）。南部のＳＢ974は４間分延びるが，西妻は西方にのびる様子。この４間目に柱には間仕切りの小柱があり，直接つながらない。北方に向う柵（ＳＡ976）を７間分検出。

4・25　東地区，西北隅に２・３棟の小建物が予想されるが，いまのところまとまらず。中央部で桁行６間以上，梁行４間の東西棟建物の西妻と南廂の柱穴を検出（ＳＢ980）。南北方向の柵（ＳＡ976）の北から３間目の柱穴に東西方向の柵（ＳＡ973）が交叉し，東へ４間西へ２間分を検出。ＳＢ974の桁行６間目の柱穴を検出。

4・26　東地区，北西隅の建物はまだまとまらないが，その南で３間×２間の東西棟小建物がまとまり（ＳＢ982），西に３間分の南北方向の柵（ＳＡ981）がある。南部のＳＢ974の西妻柱を検出，桁行は６間。

4・27　発掘区全域の精査を開始。ＳＡ973はＳＡ976の西へ５間延びる。ＳＢ970の南西隅にかかる土壙は井戸になり（ＳＥ967），その東にもう１基の井戸がある（ＳＥ968）。

5・1　東地区，中央部の東西棟建物（ＳＢ980）の全貌が判明。すなわち，当初は四面廂付の建物であるが，後に南北２面の廂を建替え，東西２面の廂を除去している。なお，西南隅の廂柱穴にＳＢ970の身舎北側柱が重複しており，ＳＢ970の方が新しいことになる。

5・4　東地区，ＳＡ981の西への延長部を探るため西方に発掘区を拡張。中地区，ＳＢ861の東妻を求めて発掘区を拡張，東妻の柱穴が出現し桁行が５間となる。

5・7　空中写真測量の準備。

5・8　地上遺構写真撮影。

5・9　空中写真測量。

5・10　地上遺構写真撮影。

5・11　部分実測の準備。

5・13　補足調査開始。

5・18　現地説明会。

5・23　東二坊大路側溝探索のため，校庭の東端に試掘坑を設定。

5・25　ＳＤ881の部分的な発掘を開始し，大きく３層にわかれることを確認(fig. 3)。

5・27　ＳＤ881の全域を発掘することに決定，着手。東二坊大路側溝出現，青灰色砂と褐色粘土の地山に掘りこんだ溝の西肩があらわれ，溝には青緑色粘質土が堆積。

6・4　ＳＤ881を完掘，東二坊大路側溝とともに写真撮影。埋戻し開始。本日で発掘のすべてを終了。

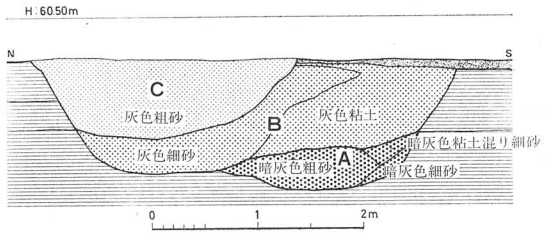

fig. 3　ＳＤ881堆積土層図

4　写真測量

遺構の実測は写真測量によって行った。航空写真は第83次調査地域を昭和48年９月27日，第86次調査地域を昭和49年５月９日にアジア航測株式会社が撮影した。撮影はヘリコプターにカメラを搭載して行ったもので，60％のオーバラップと30％のサイドラップを加味している。撮影の仕様はつぎのとおりである。

カ メ ラ ： ウイルドＲＣ―５―Ａ　　絞　　り ： ８～16
レ ン ズ ： 115㎜（18/12）　　高　　度 ： 1/200 図作成用　70m
フイルム ： コダック　エアロタイプ　　1/20 図作成用　20m
露　　出 ： 1/150～1/250秒　　変位修正機 ： ウイルドＥ４型

あらかじめ標定点を遺構面に設置して位置と標高を計測したのち，撮影を行う。この標定点にもとずき，遺構図面と遺構写真とを作成した。今回の報告書に用いた図面は，まず縮尺1/50で2.5㎝間隔の等高線と随所に絶対高を記入した原本をつくり，これを見やすいように再度整理したものである。写真は変位修正機を用いてカメラの傾きを修正した歪みのない垂直写真であり，図面と写真とを対比することが可能となるように配慮した。写真測量の後，補足調査の過程で検出した若干の遺構については，図面にあらわれるが写真には出ていない。また，重複す柱穴の前後関係なども最終調査で逆転するものがあり，そのことについても図面で修正した。

標定点No.	X	Y	H
B.M.I	-146,168.607	-17,689.621	61 007
1	-146,223.320	-17,685.238	60.049
4	-146,194.689	-17,685.238	60.208
7	-146,168.881	-17,685.238	60.078
22	-146,187.793	-17,650.070	60.278
23	-146,194.689	-17,650.070	60.295
26	-146,221.693	-17,650.070	60.211
44	-146,174.587	-17,614.928	60.388
46	-146,194.689	-17,614.928	60.327
49	-146,224.221	-17,614.928	60.313
55	-146,173.044	-17,615.682	61.434
57	-146,145.085	-17,615.682	61.468
58	-146,146.396	-17,610.652	60.464
62	-146,200.407	-17,610.652	60.297
71	-146,222.745	-17,582.994	60.398
73	-146,200.407	-17,582.994	60.599
74	-146,187.907	-17,582.994	60.619
97	-146,233.502	-17,544.643	60.605
102	-146,189.981	-17,554.643	60.698
104	-146,170.990	-17,554.643	60.653

※１～49は73年３月16日，
51～104は74年５月７日撮影

Tab. 1　６ＡＦＩ-Ｈ区標定点一覧表

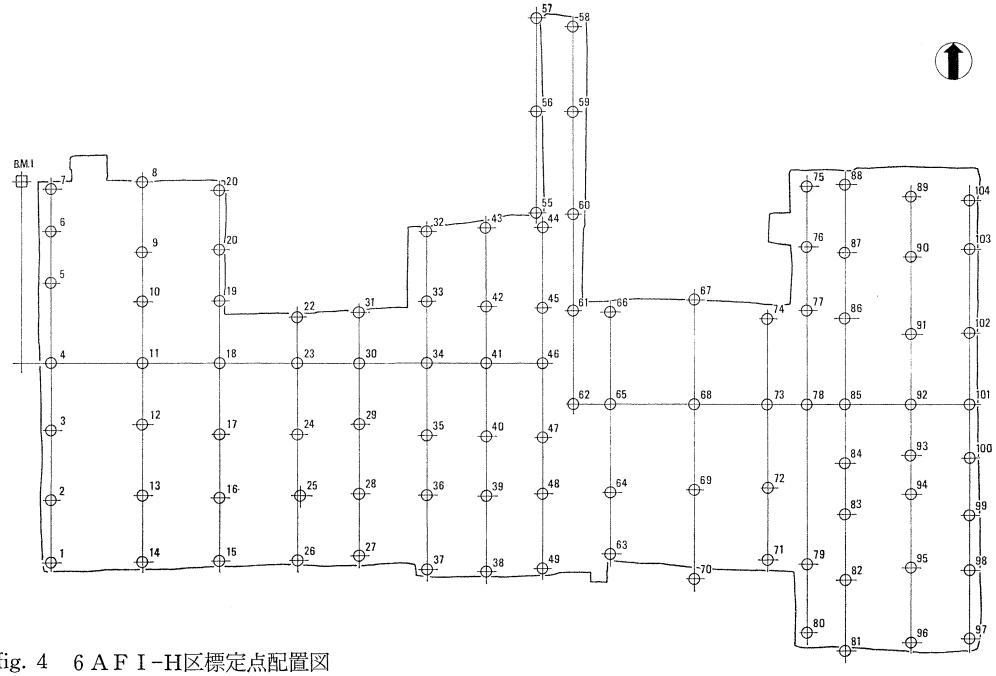

fig. 4　６ＡＦＩ-Ｈ区標定点配置図